

今

年5月に『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』を、朝日新聞社から上梓した。私はこの本のリサーチのために丸3年をかけている。

リサーチの過程で、新潟へ行った。この港から9万3340人に

若き天才研究者の想い出

@Nigata

およぶ人々が、生まれた土地でもないし親類縁者もほとんどいない北朝鮮に「帰国」していった。

新潟港の埠頭で霧にほやけた水平線を眺めていると、私の脳裡に一人の日本人研究者の顔が浮かんできた。ミノ・ホカリ（保莉実）は新潟で生まれ育ち、一橋大学の大

学院から、私が教員を務めるオーストラリア国立大学（ANU）に移り、そこでPhDを授与された。

ミノは砂漠を旅し、アボリジニ（オーストラリア先住民）の歴史と哲学を学んだ。彼はアボリジニを研究しなかった。その代わりに彼は、アボリジニと研究したのである。

ミノ・ホカリの膨大な学習の成果は、『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2004年）としてまとめられた。この本は、「アボリジニの歴史と哲学」を越えて、多くのことをわたしたちに問いかける。「歴史」とは何か。わたしたちはいかにして知識と対話するのか。どのようにして過去を経験するのか。そしてどのように「歴史する」のか。それはミノによる知識へのアプローチが、いわゆる「アカデミア」の制限から溢れ出し、日常実践に到達していたからに他ならない。

ミノの問いかけは、人文社会研究者に激しくて厳しい衝撃を与えた。この本は、すでにクラシックと呼んで構わないと思う。現在では多くの大学と研究所で、テキストとして使用されている。

この本の初校が出版社から届いたころ、ミノはメルボルンのホスピスで、自分の身体を襲った残酷な病が強い極度な恐怖と対峙していた。しかし、ミノは逃げなかった。決して人が経験することができないはずの「死」とすら、彼は対話しようと試みていたのである。2004年5月、一人の日本人の天才研究者は、惜しまれながら32年間のその短すぎる生涯を閉じた。

「あなたの生活にたびたびお邪魔して、ごめんなさい」

私のオフィスに入ってくるたびに、いつもミノが言っていた言葉が、新潟港の霧にほやけた水平線の向こう側から聞こえてくるようになった。☹